

旅の「移動」によって発生する情感とその発生機構に関する研究

福田 学

指導教員 家田 仁 教授

1. 緒言

旅は、移動することを必然的に伴うが、旅における移動の位置づけは時代とともに変遷している。我が国の大衆観光の端緒である熊野詣では、旅の移動は「イニシエーション（通過儀礼）」としての性格を持っていたが、江戸時代になり、それは旅の楽しみそのものとなった。翻って現代における観光行動では、旅は移動と目的地での活動に二分され、移動は金銭的・時間的コストとして認知されるようになった。

本研究は、時間的ないし金銭的コストにおける認識を超えた、旅の「移動」における情感を分析対象から抽出することで、旅の移動が旅行者にどのような非日常体験をもたらすかを明らかにする。そして、「目的地」への注目によって単なる手段として従属化した「移動」を、いま一度非日常体験という旅全体の目的の中に位置づけなおし、旅の全体性を取り戻すことを目的としている。

2. 研究手法

2.1 分析対象

分析対象は近代から現代にかけての日本の有名文学作品とした。これは、以下の理由による。

- ・ 広範な読者から長年にわたって評価されているため、記述にリアリティと普遍性がある
- ・ 収集可能なデータが多数である
- ・ 記述をそのまま抽出可能である
- ・ 現代日本における旅への示唆を得ることができる

2.2.1 文学作品の抽出

大手出版社の文庫解説目録（本研究では新潮文庫解説目録）の書籍題名・解説の記述の中から、次の条件に合致するものを抽出した。

- ・ 日本の作家により記述されている
- ・ 自らの意思によって一時的に日常生活圏から離れ、主体的に生活の変化を体験することを目的とする行動（旅行行動）が内容に含まれている
- ・ 近代の始まりである明治維新（1868 年）より 1999 年までに初版年、場面設定が収まる
ここで 1999 年までとしたのは一定の年月にわたり評価されてきた作品を抽出するためである。

2.2.2 場面の抽出

ここでは、場面を「言語表現によって事態として形作られた、具体的な時間・空間・出来事が連続するひとくぎりの記述」とであると定義し、具体的には時間・場所・出来事について非連続な個所がない連続した記述のうち、最長のものとする。さらに、以下の条件を満たす場面を抽出した。

- ・ 旅行者が移動中であると理解できる記述を含んでいる
- ・ 「～と感じた」、「～と思った」など、旅行者の気持ちの内容を与える言葉を含み、かつそれが、旅における移動が時間的ないし金銭的コストとして作用していることを示す気持ち（退屈や苦痛など）でない
- ・ 「悲しい」、「興味を深めた」など旅行者の心理作用に関わる言葉を含み、かつそれが、旅における移動が時間的ないし金銭的コストとして作用していることを示す心理作用（退屈や苦痛など）でない

2.2.3 場面のデータ化

移動手段・目的、情感の契機、情感の感じ方、情感の内容の 4 項目について、場面から読み取り、さらに作品名、作者名、初版年、出版社、頁範囲、抽出した場面全文、備考とともに通し番号を付してデ

ータ化した。

データ番号	8-1
作品名	砂の城
作者	遠藤周作
年代	1976
出版社	新潮文庫
頁	197
場面	東京湾の上で飛行機は傾く。いや、地球が傾くと言ったほうがいいかもしれない。眼下には夜の東京がどこまでも拡がっている。大きなシャンデリアのようにキラキラと光っている東京。泰子はそのキラキラと光るどこかに一人一人の人生や生活があるのだな、とフツと感ずる。
移動手段	パリへ向かう航空機
目的	
情感の内容	他者の人生や生活を思い、感傷にひたっている
情感の契機	飛行機の車窓から見える夜景
情感の感じ方	飛行機の車窓から見える夜景の一つひとつに他者の生活や人生を想像する
備考	

表1：場面のデータ化の例

2.3 類型化

移動手段・目的、情感の契機、情感の感じ方、情感の内容の4項目について、それぞれ類型化した上で、一つの表に整理した。

2.4 比較考察

現代の旅における移動に伴って生じる情感の特徴を整理し、江戸時代以前の旅における情感の特徴と比較した。そのうえで、現代における旅の移動の情感が旅全体の中で有する積極的な意味を検討した。

3. 類型化の結果

「移動手段・目的」については、「目的地の中の移動」にかかわる移動手段・目的と、「目的地までの移動」にかかわる移動手段・目的の2種類に分類できた。

「情感の契機」については、情感の発生が「自発的」なもの、すなわち情感の契機（対象）が情感と同時に外的事物として存在しないようなものと、情感の発生が「外発的」なもの、すなわち情感の契機（対象）が情感と同時に外的事物として存在するものの2種類に分類できた。

「情感の感じ方」については、「想像力を働かせ感じている」もの、すなわち旅行者が外的事物に対して別のイメージを重ね合わせたり、イメージを膨らませたりといった、旅行者の能動的な思考

イメージを介在して情感を感受していることがデータから判断できるものと、「直観的に感じている」もの、すなわち情感の描写に旅行者の思考イメージに関係する記述を一切伴わず、旅行者の思考イメージを介さずダイレクトに情感を感受していることがデータから判断できるものの2種類に分類できた。

「情感の内容」については、情感の内容に基づいて構造化し、大項目で10通り、小項目では18通りに類型化することができた。

以上の結果を踏まえ、整理した結果、以下の表が得られた。

		情感の感じ方	
		直観的に感じている	想像力を働かせ感じている
情感の契機	自発的	自然な感情のこみ上げ 内省的な気持ち 余韻 解放感	旅で体験した出来事の追想 旅の未来に待つ出来事の想像
	外発的	目的地への到着・別離への情感 ・はじめて見る目的地の風景へのおどろき ・目的地の見納めの感傷 変化の感受 ・偶然的变化への意外感 ・旅行者自身の感受性の増大による意外感 ・旅行者と旅先の社会との関係の変化による意外感 自己存在の客観的認識 ・自分が「今ここに確か」に居ることを改めて確認する ・「今自分が置かれている状況」を改めて確認する	「旅している」情感 ・旅における日常から離れていく 解放感 ・旅における一期一会の別離の感傷 ・旅における途上にあることの実感 周囲の風景・他者に影らむ感傷 ・他者の暮らしや人生への興味 ・他者や風景への感情移入 ・他者や風景に投影された自分の内面の感受
		・赤字→「目的地までの移動」で主にみられる情感 ・黒字→「目的地の中の移動」で主にみられる情感	

表2：情感とその状況の類型化

4. 比較考察の結果

4.1 「目的地の中の移動」で生じる情感

佐々木(2000)は旅の目的地における旅行者の「快」経験の特性として、「気楽さ」「面白さ」「新しさ」「危うさ」の4つを挙げている。これらを本研究で得られた「目的地の中の移動」で生じるすべての情感について対応を検討すると、以下のようになる。

- ・「余韻」は、主に旅先での娯楽体験を余韻として感じているものであり、「面白さ」に対応する
- ・「解放感」は、「気楽さ」に対応する
- ・「旅行者自身の感受性の増大による意外感」は、「新しさ」に対応する
- ・「旅行者と旅先の社会との関係の変化による意外感」は、「新しさ」に対応する

- ・ 「自分が『今ここに確かにいる』ことを改めて確認する」は、「新しさ」に対応する
- ・ 「『今自分が置かれている状況』を改めて確認する」は、「新しさ」に対応する

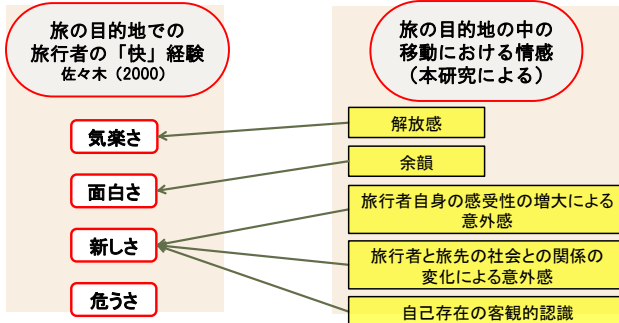


図1：旅行者の「快」経験と

旅の目的地の中の移動における情感の対応関係

このように、いずれの情感も旅行者の「快」経験として考えられることが分かる。このことより、江戸時代同様に、旅の目的地における移動は旅行者の「快」経験、つまり楽しみにつながっているといえる。

4.2 「目的地までの移動」で生じる情感

「目的地までの移動」で生じる情感をデータから改めて整理すると、以下の特徴を指摘することができる。

- ・ 「旅における日常から離れていく解放感」、「旅における一期一会の別離の感傷」、「旅における途上にあることの実感」においては、交通具・施設が出発・別離などのある種の演出性を持ち、旅行者の想像力が高められている状態にある
- ・ 「他者の暮らしや人生への興味」、「他者や風景への感情移入」、「他者や風景に投影された自分の内面の感受」においては、車窓風景や見知らぬ他者などへの一方的な視線によって、外界への自己意識の反映を伴う想像力が亢進している状態にある
- ・ 「旅で体験した出来事の追想」、「旅の未来に待つ出来事の想像」においては、個人的な時間の中で、旅の未来や過去を自分の中に「内在化」していく状態にある

- ・ 「自然な感情のこみ上げ」、「内省的な気持ち」においては、個人的な時間の中で、素直に自分自身と向き合う状態にある

これらの特徴について、上の2つは「想像力」に関係し、下の2つは「個人的な時間の享受」に関係している。これらはいずれも江戸時代以前の旅の移動においては顕著でなく、ここから、現代における「目的地までの移動」の持つ特徴的な機能として、「想像力の場としての機能」「個人的な時間を与える機能」の2つを考えることができる。そしてこれらの機能がもたらしうる情感は、前出の旅行者の「快」経験とはほとんど直接には結び付かず、いうなれば旅行者意識の変容と呼べるものである。これは、現代における一種の疑似的なイニシエーションと考えることもできよう。

5. 結論

「移動」は「目的地までの移動」と、「目的地の中の移動」の2種類に大別することができた。

また、そこで発生する情感は、「情感の契機」という観点からは「自発的」および「外発的」の2種類に分類でき、また「情感の感じ方」の観点からは「想像力を働かせ感じている」および「直観的に感じている」の2種類に分類することができた。さらに「情感の内容」という観点では大項目で10通り、小項目では18通りに類型化が行えた。これらの類型化によって移動中の旅行者における多様な情感の存在が示されただけでなく、その捉え方についても、情感の契機・感じ方・内容という3観点で分類が可能であるという仮説的な枠組み（体系）を提示することができたといえる。

さらに、旅の移動において、現代の旅行者が感じる情感が、旅全体の中でもつ意味を考えたとき、「目的地の中の移動」で生じる情感と「目的地までの移動」で生じる情感の性質は大きく異なっている。前者は江戸時代同様に、旅行者の「快」経験、つまり旅の楽しみにつながる情感であるのに対し、後者はある種の旅行者意識の変容を与える情感、いいかえれば現代における「疑似イニシエーション」として

の情感であるといえる。

参考文献

1. 小林和彦：『ボクには世界がこう見えていた—統合失調症闘病記—』，新潮文庫，2011
2. 三島由紀夫：『金閣寺』，新潮文庫，1960
3. 安部公房：『砂の女』，新潮文庫，1981
4. 安部公房：『箱男』，新潮文庫，1982
5. 安部公房：『燃え尽きた地図』，新潮文庫，1980
6. 安部公房：『飢餓同盟』，新潮文庫，1980
7. 島崎藤村：『破戒』，新潮文庫，1954
8. 遠藤周作：『砂の城』，新潮文庫，1979
9. 遠藤周作：『沈黙』，新潮文庫，1981
10. 沢木耕太郎：『深夜特急 1 香港・マカオ』，新潮文庫，1994
11. 沢木耕太郎：『深夜特急 2 マレー半島・シンガポール』，新潮文庫，1994
12. 沢木耕太郎：『深夜特急 3 インド・ネパール』，新潮文庫，1994
13. 沢木耕太郎：『深夜特急 4 シルクロード』，新潮文庫，1994
14. 沢木耕太郎：『深夜特急 5 トルコ・ギリシャ・地中海』，新潮文庫，1994
15. 沢木耕太郎：『深夜特急 6 南ヨーロッパ・ロンドン』，新潮文庫，1994
16. 沢木耕太郎：『旅する力 深夜特急ノート』，新潮文庫，2010
17. 新田次郎：『孤高の人(上)』，新潮文庫，1973
18. 新田次郎：『孤高の人(下)』，新潮文庫，1973
19. 夏目漱石：『草枕』，新潮文庫，1950
20. 川端康成：『雪国』，新潮文庫，1947
21. 川端康成：『伊豆の踊り子』，新潮文庫，1950
22. 壇一雄：『火宅の人(上)』，新潮文庫，1981
23. 壇一雄：『火宅の人(下)』，新潮文庫，1981
24. 井伏鱒二：『駅前旅館』，新潮文庫，1960
25. 国木田独步：『武蔵野』，新潮文庫，1949
26. 井上靖：『北の海(上)』，新潮文庫，2003
27. 井上靖：『北の海(下)』，新潮文庫，2003
28. 井上靖：『しろばんば』，新潮文庫，1965
29. つげ義春：『新版 貧困旅行記』，新潮文庫，1995
30. 懷徳堂記念会：『旅立ちのかたち』，和泉書院，2009
31. エリック・リード 伊藤誓訳：『旅の思想史』，法政大学出版局，1993
32. 『八画文化会館 創刊号 Vol.1』，八画出版部，2011
33. 『八画文化会館 Vol.2』，八画出版部，2012
34. 中上健次：『岬』，文春文庫，1978
35. 佐々木土師二：『観光旅行の心理学』，北大路書房，2007
36. ドボク・サミット実行委員会編：『ドボク・サミット』，武蔵野美術大学出版局，2009
37. 角幡唯介：『空白の五マイル チベット、世界最大のツアンポー峡谷に挑む』，集英社文庫，2012
38. ジョン・クラカワー 佐藤鈴夫訳：『荒野へ』，集英社文庫，2007
39. 都築響一：『賃貸宇宙 UNIVERSE for RENT(上)』，ちくま文庫，2005
40. 都築響一：『ROADSIDE JAPAN 珍日本紀行 西日本編』，ちくま文庫，2000
41. パウロ・コエーリョ 山川紘矢+山川亜希子訳：『星の巡礼』，角川文庫，1998
42. 中野純：『闇と暮らす。夜を知り、闇と親しむ』，誠文堂新光社，2012
43. 宮田珠己：『だいたい四国八十八ヶ所』，本の雑誌社，2011
44. 前田勇：『観光とサービスの心理学 観光行動学序説』，学文社，1995
45. 前田勇：『観光はいつ生まれたか』，アットホーム株式会社大学教授対談シリーズ，2001
46. 前田勇：旅する理由と心理、旅の楽しさ，ノーマライゼーション 第25巻 第10号，10-13，10月1日，2005
47. 前田勇：「豊かな観光」と「観光における豊かさ」に関する考察，立教大学観光学部紀要 第3号，1-14，3月23日，2001
48. 前田勇：旅館の特徴としての“曖昧性”に関する

- る分析, 立教大学観光学部紀要 第 4 号, 1-18, 3 月 23 日, 2002
49. 前田勇: ホスピタリティと観光事業, 観光ホスピタリティ教育 第 1 号, 4-16, 3 月 11 日, 2006
50. 前田勇: サービス成熟社会の課題, 立教大学観光学部紀要 第 5 号, 1-16, 3 月 23 日, 2003
51. 前田勇: 「サービス」用語法の分析, 立教大学観光学部紀要 第 1 号, 1-16, 3 月 20 日, 1999
52. 久米禎子: 心理療法における非日常性について, 鳴門教育大学研究紀要 第 23 巻, 227-232, 3 月 3 日, 2008
53. 佐々木宏茂: ツーリズムに於けるグローバルスタンダードの特異性, 観光学研究 第 1 号, 39-46, 3 月, 2002
54. 須藤廣: 現代の観光における「まなざし」の非対称性—タイの山岳民族「首長族 カヤン族」の観光化をめぐる—, 都市政策研究所紀要 第 1 号, 31-41, 3 月, 2007
55. 大橋昭一: 現代レジャー理論の一考察—ポストモダニティ・レジャー理論を展望して—, 観光学 第 5 号, 7-17, 7 月 17 日, 2011
56. 高山啓子: 社会現象としての観光—メディアによる観光のイメージ構成—, 川村女子大学研究紀要 第 16 巻 第 2 号, 79-90, 3 月 15 日, 2005
57. 吉川茂: 大学生の観光動機と観光懸念に関する心理学的考察, 阪南論集 人文・自然科学編 第 47 巻 第 2 号, 125-133, 3 月, 2012
58. 石出靖雄: 小説における物語場面—漱石『こころ』を題材として—, 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊 16 号—2, 249-260, 3 月, 2009
59. 白井義男: 長期滞在型旅行における誘因の考察—快樂消費の視点から—, 地域政策研究 第 15 巻 第 1 号, 65-79, 8 月, 2012
60. 武内一良: 観光業界におけるホスピタリティの理論的考察, 観光ホスピタリティ教育 第 2 号, 2-16, 7 月 31 日, 2007
61. 西村尚剛: ブランドと観光産業についての—考察, 観光学 第 7 号, 29-37, 7 月, 2012
62. 笠木日南子: 芸術を通じての自己経験, 美術教育学: 美術科教育学会誌 第 21 号, 123-134, 3 月 21 日, 2000
63. 池田光穂: フィクショナル・ツーリズム—虚構と現実の旅の文化比較—, 『21 世紀とツーリズム—ヒューマンルネッサンス・ツーリズム・リゾート』, ヒューマンルネッサンス研究所, 167-192, 5 月, 1991
64. 林幸史: 旅行者の心理的報酬を規定する状況要因, 日本社会心理学会第 48 回大会発表論文集, 9 月, 2007